



特別展観展示風景

市制70周年記念

「仙波東照宮宝物特別展観」

平成4年5月26日(火)から6月7日(日)まで当館特別展示室において「仙波東照宮宝物特別展観」を開催いたしました。

仙波東照宮は、元和3年(1617)、徳川家康公の遺骸を久能山から日光へ移送する一行が喜多院に4日間逗留し大法要を営んだことから、天海僧正が同院の大堂に自刻の家康公の神像を奉斎したことに始まるといわれています。当時の東照社の規模は、記録によると寛永10年(1633)には喜多院境内に本殿、拝殿、鳥居、鐘楼門が建てられたようです。現在の東照宮は、寛永15年(1638)の川越大火による焼失の後、3代将軍家光公が堀田加賀守正盛に命じて再建させ、寛永17年(1640)に完成したものです。本殿ほか6棟の建造物はすべて国の重要文化財に指定され、川越の名所として多くの人々に親しまれています。

今回の特別展観は、市制施行70周年および全

国東照宮連合会平成4年度総会が川越市で行われるのを記念して開催されたものです。展示資料は、重要文化財「三十六歌仙額」36面(一部複製品を含む)、県指定文化財「鷹絵額」12面、隨身像一対、狛犬一対で、他に川越市蔵当館保管の「徳川家康画像」(重要美術品)を特別出品としました。

東照宮の社宝はいずれも本県を代表する逸品で、一堂に会して公開される機会が殆どないためか、会期中の来館者は1万名を数えました。改めてその人気の高さに驚かされた次第です。また6月3日に全国東照宮連合会の関係者250余名のお客様をお迎えして御好評をいただいたことは、当館にとっても大変名誉なことでした。

最後に本展の開催にあたり種々ご協力下さいました東照宮関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

「主図合結記」本の川越城図と

静嘉堂文庫蔵「武州川越城図」について

1. はじめに

川越市立博物館の第5回企画展「川越城一失われた遺構を探る」では、絵図から川越城の姿を探ってみることを一つの柱にしていた。城絵図は縄張りの変遷を辿るには最も適した資料で、今回の企画展では川越城を描いた絵図類20点程を展示した。

ここでは、これらの中で川越城の縄張りの変遷を探るために、「主図合結記」本の川越城図と静嘉堂文庫蔵「武州川越城図」の2点を取り上げて絵図の内容を検討してみたい。

2. 「主図合結記」本の川越城図について

「主図合結記」は江戸時代の城郭絵図集で、全国の諸大名の居城および城下町周辺を描いた絵図と城主系譜を集大成したものである。この「主図合結記」は全国各地に類本や異本が数多く伝えられているが、その著者や成立年代は今のところ不明である。しかし矢守一彦氏の⁽¹⁾考察によると、伝えられている写本の中で名古屋市蓬左文庫所蔵のものが一番原本に近く、尚かつ推定成立年代が最も古いものであるとしている。そして城絵図の比較検討から、蓬左文庫本「主図合結記」ないし原本の成立期を正保年間（16

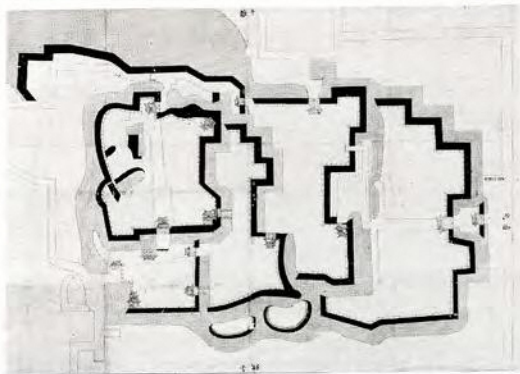
44～1648）頃と推定している。

この「主図合結記」に記載されている川越城図には、同様の絵図がいくつも伝わっており、当館所蔵の「武州河越城之図」や蓬左文庫蔵「武州河越城図」、静嘉堂文庫蔵「武州川越城之図」（資料番号77-65-12252）などがその系統のものと考えられる。また、喜多院所蔵の「城郭絵図」は折本で全8冊の形式をとっているが、ここに収められている「武蔵川越城図」も「主図合結記」と同系統のもので、この本は巻冊編成は異なっているが「主図合結記」の類本と考えられる。

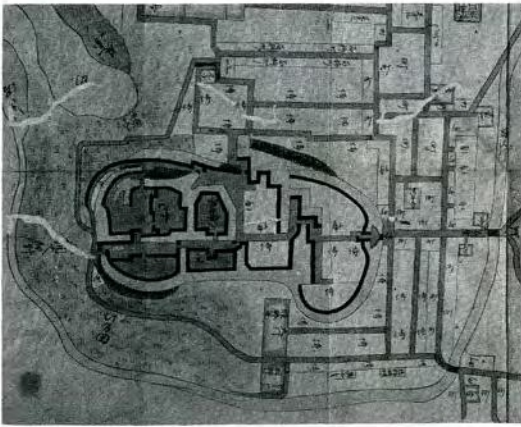
このような「主図合結記」本の川越城図は、完成された川越城の姿と考えられる慶応3年（1867）頃の川越城図（川越市立図書館所蔵）と比較すると、次のような大きな特徴を指摘できる。それは(1) 本丸の北東部に位置する新曲輪が描かれていないこと、(2) 本丸の南東部の田曲輪が完成されたものではないこと、(3) 西大手の馬出しの濠が外濠と連結しており、馬出しの形態も丸馬出しではないこと、(4) 南大手にあたる部分に丸馬出しが描かれていないことである。これらの特徴をもつ川越城図について、矢守氏は「寛永15年以前の状態を写した図というよりは、やはり作図の杜撰さによるものとすべきであろう⁽²⁾」という見解を述べている。

3. 静嘉堂文庫蔵「武州川越城図」について

東京都世田谷区にある静嘉堂文庫には2点の川越城図が収蔵されている。その内の1点である「武州川越城図」（資料番号77-65-12251）は裏書に「武州川越 七万五千石 松平伊豆守」とあるものである。この絵図に描かれた川越城図は、前に述べた「主図合結記」本の川越城図



「武州河越城之図」 川越市立博物館蔵



武州川越城図(部分) 静嘉堂文庫蔵

の特徴をはほぼそのまま指摘できるのである。

この絵図の成立年代を推定するものに絵図の裏書がある。裏書にある松平伊豆守信綱が川越藩で七万五千石を領したのは正保4年(1647)以降寛文2年(1662)までで、この裏書をそのまま信用するとこの絵図は信綱時代の川越城と城下を描いたものになる。

絵図内容を検討すると、「川場口」(仙波口)に「尼子」の名前が記されている。『川越素麺』(寛延2年以前成立)によると、仙波口は城の外曲輪の役割をなし、木戸の内には馬たまりを構えて、信綱時代には尼子八郎左衛門の長屋の角が番所に用いられたと記している。絵図中の「尼子」はこの尼子八郎左衛門をさしているものと考えられる。万治元年(1658)の信綱家臣の分限帳によれば、尼子八郎左衛門は300石の家臣であったことがわかり、信綱時代の絵図であることを裏付けている。

ところがこの絵図をよく見ると、川越城の北側に「眼勝寺」という寺がみとめられる。「眼勝寺」は酒井家の菩提寺であった「源昌寺」の誤記と考えられる。源昌寺は川越城主酒井忠利が紺屋(現坂戸市)に建てた寺で、駿州の藤枝に父正親の菩提所として建てた繁林山源昌寺から住持を招いて開いたという⁽³⁾。川越城下にあった源昌寺については『三芳野名勝図会』には、

「酒井備後侯御城主の御時、曹洞宗南陽山源昌寺を爰に移さる。御息讃岐侯、寛永十一甲戌年、若州小浜に移封の時、源昌寺は紺屋村へ引けたり」とあり、酒井忠利が城下に移し、その子の忠勝が寛永11年(1634)に小浜へ転封になる時に紺屋村へ移ったと記している。城下に移した経緯は不明な点もあるが、「榎本弥左衛門覚書」にも「此源昌寺ハ酒井讃岐様御ぼだい寺也、今ハ松平伊豆守様御代ニ成候て、高谷村(紺屋)へひけ申、其跡只今ハ代官町と申也」とあるように、信綱時代には城下に源昌寺は存在しなかったと考えられる。

このようにこの絵図の年代推定には一致しない部分もあり、もう少し検討の必要があるが、川越城及び城下を描いた絵図では最も古い部類に入ることは確かであろう。

4. まとめ

「主図合結記」本の川越城図と静嘉堂文庫蔵「武州川越城図」は、これまで見てきたように共通の縄張りを描いている。「主図合結記」の川越城の縄張りについては、作図の杜撰さによるというのがこれまでの考えのようであるが、静嘉堂文庫蔵「武州川越城図」の確認により、こうした形態の川越城がその縄張りの変遷の一過程として実在性を帯びてきたことになる。この形態の川越城がいつ頃のものかは検討を要する問題であるが、今のところ松平信綱の川越城修築の一時期と考えるのが妥当のようである。

『川越市史』⁽⁴⁾によれば川越城修築の時期を寛永の末年頃かあるいはそれより遅れて着手され、完成したのは慶安・承応頃だったとしている。

- (1)(2) 『城郭図譜 主図合結記』矢守一彦編
- (3) 『広報坂戸』「市史編さんだより68」昭和59年1月15日号
- (4) 『川越市史 第三巻近世編』P150~152

(学芸員 大野 政己)

山田衛居と仙波東照宮の宝物

仙波東照宮の社宝といえば、誰もがまず思い浮かべるのが「三十六歌仙額」(重要文化財)と「鷹絵額」(県指定文化財)である。それほどポピュラーな存在でありながら、この二つの文化財を広く世に知らしめた陰の功労者がいることを知る人は存外少ないように思われる。

山田衛居こと石田致隆は、嘉永2年(1849)、浦和市木崎の豪農石田彦兵衛の長男として生まれた。幼少の頃より書画に親しんだ彼は、江戸に出て菊池容齋の門をたたき歴史画を学んだ。また、国学を平田延胤のぶたねに学び、とりわけ有職故実の研究に熱心であった。

明治2年、致隆は川越氷川神社の社家山田家に養嗣子として迎えられ、名を衛居と改め、翌3年から明治40年に病没するまで、同社の祠官をつとめた。衛居は多芸多趣味の人で、神職の傍ら画業にいそしみ、国学者としても一家をなした。また、無類の読書家で、和歌にも長じ、雅楽、箏曲、謡曲などの芸能にも親しんだ。こうした幅広い学芸を通じて得られた交友関係もまた多彩で、殊に画壇関係では、師容齋をはじめ、川崎千虎、河鍋暁斎、五姓田芳柳、渡辺省亭ら近代日本美術史上に名を残した作家達と親交を結んでいた。そのほか、神道家平山省齋、根岸武香、井上頼國、大槻文彦ら当代一流の学者たちや、地元の篤学新井政毅、閩秀歌人安齋教子、日本考古学の恩人エドワード・モースなど、実にそうそうたる人々との交際を持っていた。

彼の遺した「朝日舎日記」(朝日舎は衛居の別号)は、友人たちとの交流や、当時の世相風俗をいきいきと伝えてくれる記述が随所に見られ、内容的にもなかなか興味深いものがあるが、それはひとまず措くとして、ここで特に注目したいのは以下の記述である。



鷹絵額

明治十四年一月十六日

一前略。十二時風ヲ犯シテ仙波東照宮へ参拝ス。同社弊殿ニ金地ニ鷹鷹ノ額十二面アリ。寛永中阿部対島守重次朝臣ノ奉納スル処。画工ハ無名ナレドモ、狩野守信(探幽)ト云伝フ。其画実ニ精妙、狩野氏ノ流ナル常ノ手際ニ似ズ写生ノ風アリテ生ルガ如シ。就中鷹ノ羽ノ上ニ膠ヲ引テ照ヲ取りシナド、実ニ甘心セリ。他日写シ措ク可シ。又拝殿ニ寛永中岩佐又兵衛尉勝ノ図スル処三十六歌仙アリ。一種ノ風致アリテ画力可愛。着色法ハ純然タル土佐之法也。之ハ前年予十八枚写シ置ケリ。後日鷹トトモニ写スベキ也。一後略—

明治十九年八月十八日鷹少々

旭(氷川神社祠掌)・小川(鑄物業小川五郎右衛門・氷川神社の大世話人)同道仙波東照宮へ行。是ハ明治六七年之頃、同社之岩佐又兵衛之三十六歌仙半分写せしが、其後心がけたれ共時ヲ得ズ。仍テ本日弁当所持にて行き、写しのこりヲ写し畢りぬ。一後略—

(同)廿二日晴

一前略。仙波三十六歌仙画者履歴考ヲ草ス。

衛居は、絵額の模写を通じてその高い芸術性に早くから注目していたようである。また、「三十六歌仙額」の「人麿図」と「中務図」裏の銘「寛永拾七震年六月十七日 檜師土佐光信末流岩佐又兵衛尉勝意圖」の存在を知っていた。日記の文面からは発見の喜びや興奮を伝える気分は余り漂って来ないが、衛居は両絵額の特質を的確につかんでいる。彼の高い見識と画家としての鋭い直感はそのそれぞれの価値を見いださせずに置かなかつたのである。

衛居の発見（特に「三十六歌仙額」）は、やがて畏友川崎千虎（1836-1902 日本画家で内務省博物館御用掛として所蔵品の整理に従事、日本美術協会審査員、東京美術学校教授などを歴任。）の知るところとなり、明治31年齋藤栗堂が調査を行い、美術研究誌『国華』第104号に初めて紹介された。その後、川崎千虎が『古画備考』の「勝以道蘊^{かつもちどうん}」の項に「又兵衛」の名を加え、又兵衛と勝以が同一人物であることが一般に認められた。それまで又兵衛は、浮世絵の祖

と伝えられてはいたが、画歴も画風も不詳の謎の人物であった。後に岩佐家文書などの資料が発見され、やがて又兵衛像は明らかにされることになるが、衛居の発見が契機となって美術史界に大論争を巻き起こし、又兵衛研究が飛躍的に発展したことは看過出来ない事実である。

ところで、日記中にある衛居の模写や「仙波三十六歌仙画者履歴考」なるものの稿本の存在はまだ確認されていない。しかし、氷川神社に残された資料の調査が進めば、今後発見の可能性は大であると思われる。もしそのようなものが見つければ、さらに興味深い事実を明らかにすることが出来るであろう。

郷土の偉大な先覚者であり、又兵衛同様多彩な貌を見せてくれる山田衛居その人への興味は尽きない。改めて「朝日舎日記」を味読し、もっと彼の人間的魅力に接したいと考えている。

（学芸員 鈴木 邦照）

《参考文献》

「朝日舎日記」 昭和54年 川越市史編纂室
「川越の人物誌 第1集」

昭和58年 川越市教育委員会



三十六歌仙額 中務図



三十六歌仙額 柿本人麿図

社会教育と博物館(3)

学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関する、諸施設と協力し、その活動を援助すること。(博物館法第3条第1項より)

こども博物館教室

地域の歴史に興味関心をいだいて、先人の残した文化財を大切にしたい子供たちを一人でも多く育てていきたい。こんな願いをこめてはじまりました。

博物館ができる前までは、やさしい文化財教室として、20年以上つづいてきました。この時は夏休みの内3日で歴史や体験学習、文化財めぐりなどおこないながら、文化財に対する理解と関心をこどもなりに意識させ、成果をあげてきました。

平成2年に博物館がオープンすると、それまで社会教育課でおこなっていたことを博物館で行なうようになりました。これを機会に内容や方法をさらに充実発展させていきたいと考え、「こども博物館教室」と名称もかえて平成2年から年間11回土曜日を中心とした講座に変わりました。

市内の小学校4年生以上の児童・生徒を対象としてはじまり、内容も豊富になりました。

川越の歴史とフィールドワーク(3回)

わたしの選んだ文化財紹介と展示

体験 機織り

遊び道具づくり



正月行事体験

正月行事体験

他の博物館めぐり

オリエンテーリング

これらの内容を通して、文化財に対する子供たちの意識を高めていくことはもちろんのこと、地域社会の一員としての自覚や仲間意識を育てていきたいと考え、子供たち一人ひとりが活躍できる場を提供していきました。

伝統的なあそび道具づくりでは、けんだまなど単純なものでも、子供たちに人気のあるコンピューターゲームとはまた一味ちがった楽しさがあったようで、家族に紹介したり、もう一度挑戦したようです。また、はじめてうどんづくりにも挑戦するとともに、日本の食生活について体験を通して学びました。

このように、伝統的な文化をできるだけ体験を通して学んでいく機会をこれからも提供していきたいながら、子供同志の仲間意識をそだてていきたいとも考えています。

市内の各学校の子供たちが、互いに認め合い助け合いながら友達づくりの場として機能することで、参加した子供たち一人一人が自己実現できる場となればと期待しています。

(教育普及係長兼指導主事 水谷 薫)



うどんづくり体験 (清瀬博物館)

学校教育と博物館(4)

博物館は、その事業を行うに当たっては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助しうるようにも留意しなければならない。(博物館法第3条第2項より)

夏休みになると決まってしまう宿題のひとつに「自由研究」なるものがあります。この宿題のねらいは、子供一人一人の個性や興味関心を大切に、長期の休みでしかできない、また自主的、自律的な学習意欲や態度を育てることを目的としています。

しかしながら、子供たちにとってこのような学習課題は多少むずかしい一面もあるようです。

「どんなテーマがいいかな。」

「川越の歴史について調べたいんだけど」

「昆虫のことに調べてようかな……」

このようなつぶやきの声を聞くこともときどきあります。何を調べたらいいのか。どのように調べたらいいのか。充分につかめないために自由研究の目的達成が今一歩だったり、子供たちにとっては、なにか、不完全燃焼の感じを残すときもあったようです。

博物館では、子供たちの自由研究のためのテーマづくりや研究の方法、まとめ方など相談にのる会をおこなっております。川越市内の小中学校の先生方のご協力をえて毎年7月下旬、8月中旬、下旬の3回合計6日間の相談日を設け昨年このコーナーを利用した小中学生は40名近くにになりました。

ここに訪れた子供たちに対して、身近な素材からどんな情報を選び、焦点をどのように絞ったらいかなどアドバイスしました。また、どう仮説をたて解決するかという方法について相談にのったりしました。さらには調べる方法、情報をどこで手に入れることができるか、発達段階に応じたまとめ方など必要に応じてアドバイスしてまいりました。

その結果、子供が自信をもった。調べ方がわかった。楽しかった。などのご返事をいただい

たこともありました。

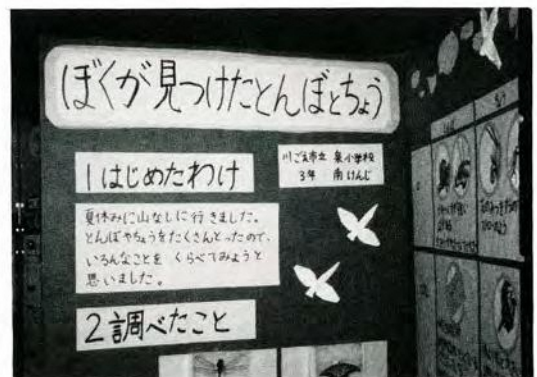
このように、博物館のような公共施設を児童生徒が主体的に利用することは、学習時代を迎えた今日、益々有意義なものといえるでしょう。さらには、このような子供たちの要望に積極的に応えていくことは、生涯学習施設の大きな役割のひとつだと思います。

子供が自ら課題を持ち、その課題解決のための学習方法を見いだし、解決していくことこそ現在子供たちに求められている能力のひとつ「自己教育力」ではないでしょうか。この力をつけるためには、学習への意欲を高めるとともに学習の方法を知ることだと思います。

現在、学校では新学習指導要領にそって新しい教育が進められています。そのなかで、学校教育を今まで以上に充実させるとともに、社会教育施設を活用し、子供の個性を大切に社会変化に対応できる児童生徒の育成をめざしています。

博物館の「夏休み相談事業」はこうした学校教育のねらいをふまえ、たいへんささやかではありますが子供たち一人一人の自己実現への一助となればと思います。

(教育普及係長兼指導主事 水谷 薫)



生徒の自由研究作品

❖今秋の特別展・企画展のお知らせ❖

〔市制施行70周年記念〕

第4回特別展 川越ゆかりの画人たち —近世から近代に活躍した11人の精華—

9月1日(火)～9月23日(水)

郷土川越にゆかりのある美術家のうち近世から近代に活躍した11作家の作品を展示し、その画業をふり返るものです。

川越ゆかりの近代日本画の巨匠 —橋本雅邦と小茂田青樹—

10月6日(火)～11月8日(日)

院展で活躍し近代の日本美術史に大きな足跡を残した川越ゆかりの二人の近代日本画の巨匠、橋本雅邦と小茂田青樹の作品を展示し、その生涯と画業をふり返るものです。

第6回企画展 川越名刀展 11月25日(水)～12月20日(日)

初雁刀剣会会員及び市民の愛蔵する名刀及び郷土刀を中心に展示し、郷土川越の文化について考えます。

資料寄贈者名簿

H2年	鳥羽 増門	塩野源太郎	沢田 和雄	村田 洋子	戸井田信雄
	碓石 勝彦	早見 長松	岩沢 房吉	荒井 常雄	後藤 國男
	中村美佐夫	榎本 昭夫	金口 正夫	寺井正一郎	筋野 良平
	松本重太郎	鈴木喜三郎	菅間 一男	内田 常夫	金子 哲雄
	坂本藤五郎	白川二三男	沼田 カツ	長島 福	井上 宗平
	田中やえ子	大塚 敬三	落合 正夫	光 西 寺	安斉 雅子
	老袋の弓取式 保存会	関己 喜治	佐々木信康	平沢 博人	下老袋自治会
	清水 長次	関口 栄作	内河 一良	内田 光雄	沢田 長松
	辻野 民雄	小川 徳次	大東東小学校	平野 幸子	
		久住 まつ	斎藤 静	松本 保	敬称略 順不同

資料をご寄贈いただき厚く御礼申し上げます。3年以降は次号以降でご紹介します。

ご寄贈いただいた資料は、今後「収藏品展」等でご紹介させていただきます。

❖❖利用状況❖❖

月	一 般			団 体			共 通				そ の 他			合 計
	大 人	学 生・生 徒	児 童	大 人	学 生・生 徒	児 童	大 人	学 生・生 徒	児 童	他館購入	招 待	免 除	入館者合計	
4月	3,996	325	773	323	51	2	2,027	123	195	3,224	223	2,473	13,735	
5月	5,913	793	776	459	41	2	3,444	318	344	5,328	216	8,791	26,425	
6月	2,205	238	285	345	25	0	1,240	34	46	1,727	91	7,291	13,527	

発行日 平成4年8月25日

発行 川越市立博物館

〒350 川越市郭町2丁目30番1号

TEL 0492-22-5399